

神國令 (神國由来) (全集別巻収載)

天保七年以前

玉田永教

恭 以は日本は神の國なり、神の國と申は、天地開闢の時神顯われまします、是を國常立尊と申奉る、祭る所伊勢外宮是なり、是神より七代を過て、伊弉諾・伊弉册尊淡路の國磯馭廬嶋にて、天照太御神を御誕生あれまし給ふ、天照太神、高天原にて三種の神器を持せ玉ひ、天津彦火瓊々杵尊に御授当今 天子まで一百貳十六代の間連続かせたまふ、誠に萬世無窮の神の國なり、土農工商皆是神の血脈にあらざるなし、神武天皇より廿九代宣化天皇まで、一千一百九十三年、吾か神國いまた外國の方便を知らず、神以て神に伝えへ、皇以て皇伝ふ、萬民正直の外他更なし、今日神の國に生れ、神の衣服を着し、神の吾穀を喰ひ、神の家に居て、神の恩を報し奉る叟を不知ものは、實に人面獸心なり、儒道は人皇十六代應神天皇の時、始て渡り来る、佛法は人王(皇)三十代欽明天皇十三年冬十月、百濟國の聖明王怒利斯致と云者を使として。始て佛法經卷幢天蓋を奉る、此時に及んで蘇我稻目、蘇我馬子是を信仰して、吾別莊を寺と當、此佛像を安置す、是日本佛法の始みて、其古跡倭の國橘寺是也、是より弘るは、華嚴宗・法宋(相)宗・俱舍宋・常(成)實宋・三論宋等なり、併し是等 神國の掟にかなわす、遂に断滅す、夫より年数立て、天台宗・真言宗・浄土宗・一向宗・禪宗・日蓮宗追々弘まる、然れとも、祖師の掟を背く邪欲の出家は、神の國に住居する叟を弁へす、剩さへ、己か神脈の血脈たる叟をしらす、利欲を貪らんかため、世間の人を誑惑す、哀哉、時の人の謀計をしらす、

抑唯一宗源は神の正道にして、五十鈴の霊音を以て、神國の言語を明らかにす、萬物幽頭の
理通らざる変なし、正直を以て心とし、明鏡を以て體とす、生ては則ち神明の恩澤を蒙
り奉、死しては則ち神魂を上天の御舎に歸す、希は又々神明の冥助に依て、生を神
國の得んもの也、豈外國に生し変を願んや、胡に太諄辭に日、一ツ心の源ヲ清らかに
して、神代の法を崇、正直の根元に歸て、邪曲の末法を捨、今宗源なる行を願ふ者也と、
敬白す、

文政四年辛巳五月五日了

用語解説

神國令 〓 原本は半紙七枚に書かれ、表紙に“神國令、藤井元助用之”と記してある。す
べて他人の筆写である。著者名が書いてないが冒頭の文句により玉田永教著
“神國由来”であることがわかる。多分この名称は共に用いたか、或いは後に
改名したかであろう。著述年月は不明、文末の年月日は筆写の年月と思われる。
三種の神器 〓 皇位の標識として歴代の天皇が受け継がれた三つの宝物。鑑と玉と劍。
当今 〓 今上天皇。当代の天皇のこと。
変 〓 事に同じ。
吾穀 〓 五穀。
橘寺 〓 橘寺は現在奈良県高市郡にある。聖徳太子の創建と称せられる天台宗の寺院。
誑惑 〓 うそを言つてまどわす。
五十鈴の霊音 〓 五十鈴川、伊勢の大神宮をさす。
幽頭 〓 幽は死後の世界。あの世をさし、頭は現実の世界、この世をさす。
太諄辭 〓 太祝詞。祝詞の美称。

吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】ページへ戻る

吉田松陰.com トップページへ